

格子越しの世界

とある部屋 (朝)

薄暗い部屋に男が二人。男1、舞台中央の上手側で胡座をかいている。男2、舞台中央の下手側で気を失い、俯せている。

明転

男1、体を前後左右に揺らしている。時折、咆哮する。男2、飛び起き、怖ず怖ずと辺りを確認する。男1、揺れ続ける。男2、男1との距離を置く。

男 2 「こ、ここは何処？ (男1を凝視) だ、誰ですか？」

数秒間の沈黙。男1、揺れが止まる。

男 1 「おはよう、新入り」

男 2 「あ、あなた、言葉を話せるんですか？」

男 1 「話せるさ。俺を何だと思っているんだよ」

男 2 「い、いや、あの、すみません。気が触れている御方なのかな、と思ったので……」

男 1 「初対面なのに、全く失敬だなあ」

男 2 「すみません」

男 1 「まあ、いいよ」

男 2 「あ、あの、ここは何処なのでし

ようか？」

男1、気怠そうに立ち上がる。舞台正面を向き、パントマイムで鉄格子を表現する。

男1 「これを見てわからない？」

男2 「て、鉄格子！ 出られないじゃないですか！」

男1 「そう、出られない」

男2 「歯で噛み切って、出られませんかね？」

男1 「（笑い混じりに）いやいや、無理だろ。これ、鉄だよ？」

男2 「そうですよね……。どうしよう……」

男1 「お前さん、気絶した状態でここに運ばれてきたけど、何をやっ

たんだ？」

男2 「無断で家に侵入して、食事をしようとしたら取り押さえられちゃって……」

男1 「よっぽど酷くやられたんだな」

男2 「はい、体中が痛いし、頭がボーっとします」

男1 「なるほどな」

数秒間の沈黙

男2 「私は、これからどうなるのですようか？」

男1 「悪いようにはならないんじゃないかな」

男2 「（強い口調で）この状況で何故そう言えるのですか？」

男1 「それは俺が長いこと、ここに

るからさ。食事は一日三回。運動の時間もある。これ、って悪くないだろ？」

男 2 「確かにそうですが……」

男 1 「『外の世界に比べると……』だろ？」

男 2 「はい」

男 1 「外から来た奴にとっては、そうかもな」

男 2 「（首を傾げ）『外から来た奴』って、あなたは……」

男 1 「そう、俺は外の世界を知らない。（床を指さしながら）“ここ”しか知らないんだ」

男 2 「あの、言っている意味が分からないのですが……」

男 1 「まあ、気にするな。いずれお前さんにも理解できる時が来るさ」

男 2 「はい……」

男 1 「そんなことより、外の世界の話

を聞かせてくれよ」

男 2 「外の世界の話ですか？」

男 1 「一度も外に出たことがないから、知りたいんだよ。外の世界には“自由”ってものがあるらしいな」

男 2 「は、はい、確かに“自由”はありますね」

男 1 「すげえな！　ところで、“自由”ってなんだ？」

男 2 「勝手気ままにできることだと思います」

男 1 「おお、すげえ！　むかついた奴をぶん殴って良いんだ！　すっげえ！」

男 2 「それは駄目です。怒られます」

男 1 「えっ？　勝手気ままに良いんでしょう？」

男 2 「それはそうですけど……、駄目です」

男 1 「じゃあ、何が勝手気ままなんだよ」

男 2 「どう説明したら伝わるんだろう……」

男 1 「お前さんもかよお」

男 2 「はい？」

男 1 「前にいた奴もそうだけど、ちゃんと外の世界の“自由”を説明してくれないんだよ」

男 2 「そう言われましても……」

男 1 「これは外に出て体感するしかないな」

男 2 「えっ？ 出れるんですか？」

男 1 「いや、出れないよ」

男 2 「ですよねえ」

男 1 「これは俺の夢なんだよ。お前さん等が言う“自由”っていうのを知りたいんだ」

男 2 「そうですか……」

男 1 「なあ、お前さんの夢はなんだ？」

男 2 「夢ですか？ そうですね……」

男 1 「目標でも何でも良いぞ」

男 2 「強いて言うなら、お腹いっぱい食べたいですね」

男 1 「は？ そんなもん、ここでも簡単に実現しちゃうよ」

男 2 「食べたい物があるんですよ。それを胃が破裂しちゃうくらい食べたいんです」

男 1 「食べたい物？」

男 2 「はい、その物の名前は分からないのですが、フルーティーな香りがして、すごく美味しいんですよ」

男 1 「ほう、興味深いな。俺も食べてみたい。それは外の世界で簡単に手に入れられるのか？」

男 2 「それが難しいんですよ。今まで一度しか食べたことがありません」

---

男 1 「そうだな。知っているのが香

りと味だけじゃ、探すのは難しいな。これは外に出て食べてみるしかないな」

男 2 「そうですよ！ 一緒にここから脱出して食べましょうよ」

男 1 「（真顔で）無理だよ」

男 2 「そう……、ですね」

重い扉が開く音がする。上手側から明かりが漏れ出す。

男 2 「（上手を指さしながら）あつ！

扉が開きましたよ！」

男 1 「そうだな」

男 2 「（立ち上がり）何をやっているんですか！ 早く行きましょうよ！ 脱出のチャンスですよ！」

---

男 1 「いや、あれは」

男 2 「（上手へ駆け出しながら）私は先に行きますよ！」

男 1 「お、おう」

男 2、上手へ消える。男 1、気怠そうに立ち上がり、ゆっくりとした足取りで上手へ向かう。

ゆっくりとした暗転

ゆっくりとした明転

野外のように明るい照明。男 2、舞台中央、正面を向いて呆然と立っている。男 1、下手から悠然と登場、男 2 の横

に腰掛ける。男1、体を揺らし、時折、咆哮する。

男 1 「おい、お前さんもこれやってみろ。(客席を指差しながら) こいつら喜んでくれるから。まあ、現実を受け入れるのは難しいと思うけど、ここで生きていくということとは、こういうことだからさ」

男 2 「この香りは間違いない……。とうとう……。見つけた……。」

男 1 「えっ? 何か言った?」

男 2 「見つけたんですよ!」

男 1 「何を?」

男 2 「だから見つけたんですよ! 探し求めていた食べ物!」

男 1 「何処に?」

男 2 「(客席を指差しながら) ほら、

こんなにいっぱい! いつ食べられるんですか?」

男 1 「こいつらは食べちゃ駄目だよ」

男 2 「どうして?」

男 1 「理由は……。ない! けど駄目!」

男 2 「ここには“自由”なんてない……。」

男1、体を揺らし咆哮。男2、男1の動作を真似る。女性の弾んだ声でアナウンスが入る。

「とあーる動物園へようこそ!」

ゆつくりとした暗転

---

(了)